

所沢市指定文化財（無形民俗文化財）

重松流祭ばやし

指定 昭和四十四年六月二十七日

「重松流祭ばやし」は、所沢生まれの古谷重松が編み出した囃子の流舞で、「しんずま」は重松の愛称です。幕末から明治期以降、所沢を中心として多摩地域にかけて広まりました。古谷家では、実家の懸崖のほかに副業として籠玉手商い、重松は行商のためには懸崖を歩き、そのあやで囃子を伝授したと伝わり、現在は、各地域の囃子連や、重松流祭囃子保存会（のぎさん）などによって保存伝承されています。

重松流の特徴は、テンポの良さと屋台囃子の小太鼓（二つ）地と碁みの掛け合いにあるといわれ、その編成は、江戸囃子と同じく大太鼓（オウゴン）一人、小太鼓（ツツ）二人、箏（ヨウケ）二人、笛（フエ）一人の五人囃子を基本構成とし、決まらずに持たず、すべて口伝で「決まらな文句」を暗誦して身につけていきます。また、囃子に合わせて、三香曳、天鼓、獅子、拍子、ひょうこ、補助、外連など、様々な踊りが繰り出されます。

創始者の古谷重松は、天保元年（一八三〇年）三月十七日に所沢村横宿（上ノ宿）に生まれました。囃子の習得や重松流創案の経緯は明らかではありませんが、一説では、大國魂神社で笛を修行し、江戸囃子を元に取り改定して夫を重松と改題して囃子を創案したと伝われます。明治二十四年（一八九一年）二月三日に世を去った重松の法名は「重法光泉信士」。重松は、この川端裏面に眠っています。

所沢市教育委員会



重松流祭囃子保存会が所沢市指定文化財として認定された川端裏面に所沢市教育委員会が設置した石碑です。

将棋の名人 福泉藤吉の墓

入口（本堂の左裏）

所沢市指定無形民俗文化財

重松流祭囃子創始者

古谷重松の墓

重松流祭囃子保存会